

論文

装束の装飾加工技法に関する研究

——平安時代における加工技法の用例を中心に——

清水 久美子

同志社女子大学
生活科学部・人間生活学科
教授

Abstract

The Heian Period witnessed the development of various techniques for adding decoration to costumes, applying decorations directly to the fabric, in order to give the costumes new qualities. This paper uses archival material from the period to analyze examples of costume-decoration techniques, illustrating their types and uses and considering their purposes and effects. The techniques studied include *uchi*, *kaineri*, *euazu*, *uchiyaazu*, *hari*, *hihegi*, and *kobari*, all of which provided luster, shine, and firmness to the costumes. Most decorated costumes were worn as an inner, rather than an outer layer; thus, the effects were only partly visible, although the overall appearance of the costume was enhanced through the effect of layering. It seems, indeed, that these techniques were more than designs intended simply to add patterns and color to costumes, but were in fact luxuries created for the pursuit of decorative beauty.

1. はじめに

平安時代以降、公家装束には染めや織りをはじめ、刺繍や描絵、摺りといった装飾技法を用いて意匠表現が行われてきた。またそれとは別に、装束の布地そのものに直接作用して新たな性能を付与するために、「打ち」や「張り」といった様々な装飾加工技法が工夫されてきた。これらは装束それ自体の持つ地質・色彩・文様によって創出される意匠美に、さらなる付加価値を与えるものといえる。しかし、このような装飾加工技法に関する先行研究はこれまで殆どみられず、具体的な実態は明らかにされていない。

本研究では、平安時代を中心に、当時の日記、

物語、故実書などの文献史料を用いて、装束に施された装飾加工技法の用例を検証し、その種類や使用実態を明らかにすると共に、装飾加工技法の目的と効果について考察する。

2. 装飾加工技法の種類と名称

平安時代から鎌倉時代初期にかけての文献史料の中には、装飾加工技法として①打ち（擣ち）、②搔練、③瑩、④擣瑩、⑤張り、⑥剥ぎ（比倍木・引倍木）、⑦粉張り（胡粉張）の名称がみられる。

それぞれの技法と効果についてまとめると、次の通りである¹⁾。

- ①「打ち」は、砧で打って柔らかくして光沢を出す。
- ②「張り」は、板に布を張って艶や張りを出す。ただし糊をつけないと、板張りだけでは光沢が出ない。

- ③「搔練」は、光沢や艶を出すために砧でよく打ち、生絹を十分に練る。
- ④「^{えうず}瑩」は、張った絹を瑩貝で摺り磨いて光沢を出す。
- ⑤「^{うちやうず}搗瑩」は、砧で叩いたり、瑩貝で磨く。
- ⑥「^へ剥ぎ」(引倍木)は、袷の裏を引き剥がして表地(打ち)だけにする。衣文を整え、耀かせる。
- ⑦「^{こぼ}粉張り」(胡粉張)は、胡粉を使い、白く艶やかにする。

なお「粉張り」については、用例も極めて少なく、現時点では不明な点が多いことから、本稿では加工法の名称の紹介にとどめたい。

3. 装飾加工技法とその用例

(1) 打ち(搗ち)

●砧打ち

『倭名類聚鈔』(930年代成立)に、裁縫の具(第百八十二)として「砧」の名称があり、これを「キヌイタ」と呼び、「搗衣^{きぬいた}石也」と記されている²⁾。また衣を打つ杵を「搗衣」といい、「ツチ」と呼称している。つまり石で作った砧を用いて衣を搗衣(杵)で打つことが平安時代の早い時期には行われていたのである。

また『古今著聞集』(第3 公家第4)に、「天曆の御時、月次御屏風の歌に搗衣^{きぬいた}の所に兼盛詠て云」として、次の歌が紹介されている。

秋深き雲井の鴈のこゑすなり衣うつべきときやきぬらん³⁾

村上天皇の時代(947～956年)に既に砧打ちの習慣があり、歌にも詠まれるほどであったことが知れる。

『源氏物語』に「ここかしこの搗^き殿より参られるものども御覧じくらべて、濃き赤黄など、つぎつぎをえらばせ給ひて」(玉鬘)とあり、あちらこちらに、布を打つ所があった。また「白妙の衣うつ砧の音も、かすかに、こなた・かなた聞きわたされ(…)」(夕顔)⁴⁾とあるように、砧打ちは平安中期以降も広く行われていた。

『枕草子』には、「うれしきもの」として、「もののをりに衣うたせにやりて、いかならむと思

ふに、きよらに得たる」⁵⁾とあり、晴れの場合に着ようと思って砧で衣を打たせたが、思いのほか見事な出来栄で戻ってきたことが嬉しいこととされている。打ちと晴れの場合との関連性や、砧打ちを他所に依頼していることが知れる。

『貞丈雑記』には、「打の事」として「砧にて打ちて光を出したるなり。後世は板引にかえても、古の儀にまかせて打というなり」⁶⁾とあり、目的は光沢をそえることで、その衣を「打衣」とも呼んだ。

砧打ちは、江戸時代の庶民の間でも行われていたが、現在ではほとんどみられなくなった。しかし打ちの技法は今も沖縄の宮古上布などの麻織物に、しなやかさと艶を付与するために行われており、伝統技術の一端が残されている。

●打ちたるもの

『栄花物語』に、「かくて五巻の日になりて、皆紅の打ちたるを著て」(もとのしずく)⁷⁾とあり、「打ちたる」ものとは女房装束の一具である打衣をさしている。『枕草子』には、中宮の姿として「紅梅の固紋浮紋の御衣ども、紅の打ちたる御衣三重が上に…」(淑景舎、春宮にまゐりたまふほどの事など)とあり、女房の装束に用いられている。

また『同書』に正暦5(994)年の松君(伊周長男通雅3歳)の童直衣姿として、「葡萄染の織物の直衣、濃き綾の打ちたる、紅梅の織物など着たまえり」(関白殿2月21日に法興院の積善寺という御堂にて一切経供養させたまふに)、『栄花物語』に、「二藍の直衣・指貫に、紅の打ちたる、白き単をぞ著たる」(歌合)とあり、男性の直衣の下に打ちを施した袷が着用されている。

これらのことから、平安時代中期以降「打った衣」が男女に着用されており、用例からも打った装束とは、男性では袷、女性では女房装束の袷、つまり打衣をさしている。

●用例

砧で打って光沢を出した装束には、それぞれ「打」の名称がつけられ、打半臂、打下襲、打袴、打指貫、打襖・打襖袴、打狩衣、打袒、打唐衣、打裳、打物、打衣などと表現されている。

①打半臂

『西宮記』（巻17）の半臂の項には、「黒半臂或打半臂」とあることから、平安時代の前半期には、半臂に打ちが施されていた。

『中右記』に、「舞人装束 青海波二人 通季、宗能着青打半臂 以銀押濱形、海浦、波文等」（康和4〈1102〉年3月20日）とあり、青海波を舞う舞人の装束に青色の打った半臂が着用され、さらに半臂には銀で文様を押す装飾が加えられた。

②打下襲

『小右記』⁸⁾に、「定親着紅色擣下襲」（長和4〈1015〉年12月4日）、『中右記』⁹⁾に、「今日大（殿）御剣螺鈿、紺地緒、縫孔雀、打下襲」（永長〈1096〉元年2月10日）、「聞鐘声着束帯、丸共帯、打下襲」（承德2〈1098〉年10月10日）、また春日祭使の装束として、「黒半臂、打下襲、縮線綾表袴」（天仁元〈1108〉年10月30日）とあり、打下襲は宮中の儀式や祭事を彩る晴装束の束帯の一具として用いられた。

また『西宮記』（巻17）¹⁰⁾の下襲の項に「蘇芳、夏冬瑩之、桜、或打、藤柳、打或張、葡萄、冬時用之、打、紅躑躅、打用」とあるように、下襲の色目と季節によって加工技法が異なっていた。『長秋記』¹¹⁾には、「参左大臣殿（…）又花田打下襲何時可着哉（…）花田打下襲謂江比染也、元三後不着也云々」（天永2〈1111〉年4月27日）とあり、花田色（所謂葡萄染）の打下襲は正月三が日に着用されたが、その後は着用されなかった。

③打袴

『うつほ物語』には、「五位より下は白きうち袴をなん給ひける」（梅の花笠）¹²⁾、また藤井

の宮の藤花の宴では、馬副廿人が「紫の衣、白絹の打ち袴着つつ…」（吹上上）¹³⁾とあり、いずれも白い打袴がみられる。

『小右記』に、五節に関連した童女の装束として「袒四重、二重、（…）茜染擣袴二腰、三倍」（万寿2〈1025〉年9月13日）とある。

『健寿御前日記』¹⁴⁾には、承安3〈1173〉年10月21日の建春門院建立の最勝光院供養に際して「青うらのひとへ、くれなゐのあやの打袴に、泥にて下絵して」（御堂供養）、安元2〈1176〉年の後白河法皇の五十の御賀のはじめの日に「五重の打袴、泥にて下絵したり。もん、何もいしたたみ」（わが身の装束）、『吉記』¹⁵⁾には、建春門院の御服として「女郎花二重織物御唐衣（…）紅打御袴、以泥畫目結」、半物の装束に「紅打袴、以銀泥染之」（承安4〈1174〉年8月）とある。

このように五節の童女、健寿御前、建春門院をはじめ半物に至るまで、女房装束の一具として打袴が着用されている。また承安・安元の頃、打袴には打って艶を出すだけでなく、さらに泥で文様を描いたり、五重とするなど贅沢なものがあつた。

なお『中右記』に、舞人の装束の表袴として、左「濃蘇芳、裏紅打」、右「款冬、裏濃打」（康和4〈1102〉年3月16日）とあり、「打表袴」の名称はみられないが、表袴の裏地に打ちが施されている。

④打指貫

『中右記』には、「春日祭使、殿下中将殿令勤仕給、（…）布衣四位五人、（…）装束綾羅錦繡、過差無極、或着打指貫、或以構風流、人驚耳目」（天仁元〈1108〉年11月1日）、また「今夕殿下中納言殿渡御東三条、（…）人々装束美麗過差、或錦繡、或畫図、或有打指貫者、（…）或作花鳥形也、各之風流不可勝計」（天永3〈1112〉年2月6日）と記されている。

つまり、装束に綾羅錦繡を用いることは過差極まりないことで、打指貫を着たり風流の工夫をすることも、人を驚かせるものとしている。

また打指貫は装束に錦繡を用いたり、図を画いたり、花や鳥の形を作りつけることと同様に風流なことでされた。打指貫は美麗で贅沢で僭上の装束であった。

⑤打襖・打襖袴

『長秋記』には、天承元（1131）年4月19日の賀茂祭に「近衛使（…）馬副雑色、皆打襖袴等付鴛鴦」とあり、馬副や雑色が打襖袴に鴛鴦の付物をして風流としている。『吉記』には、院の登山御幸に際して「殿上人右中将通親朝臣（…）童花田打襖」（安元2〈1176〉年4月27日）とあり、童が花田色の打った襖を着用している。

襖とは武官が着る朝服の欠腋袍の異称とされる¹⁶⁾。前述の襖袴は襖にはく袴のことである。

⑥狩衣

『中右記』には、「今日物忌也（…）櫛、近末、得ひ染打狩衣、有畫図」（天永3〈1112〉年2月10日）とあり、葡萄染の狩衣に打ちが施され、さらに図が描かれている。また「使左宰相中将忠教着座（…）取物四人、紅梅唐綾裏打狩衣」（天仁元〈1108〉年12月16日）とあり、狩衣の裏に打ちが施されている。

狩衣は襖ともいわれるが、ここでは朝服である欠腋袍とは考えにくいので、本来の狩衣の用例と考える。

⑦打相

『小右記』に、賀茂祭に際して「仍奉幣、加十二ヶ月幣、（…）良頼従者廿人、紅染擣祖、過差之極耳」（万寿4〈1027〉年4月15日）とあり、紅染の打相¹⁷⁾を着たことが過差の極みと批判されている。『長秋記』にも同祭に「次使装束畢、腋闕袍（…）濃打祖単衣、（…）隨身二人（…）紅打祖単衣」（保延元〈1135〉年4月18日）とあり、およそ100年後にも賀茂祭に紅打相を着用する傾向は続いている。

また『古今著聞集』（第3・公事第4）に、「殿下（…）御衣をぬぎてたまはせけり。（…）くれなるのうちあこめ御ひとへをくりいだされけ

り。御ひとへをば敦久にたまひ、打衣をば盛雅に給けり」とあり、関白師實から隨身に賜わった着衣の打相を打衣といい換えていることから、打相＝打衣との認識がなされている。

一方『胡曹抄』（忠順記、永暦2〈1161〉年1月29日）には、婚礼行事の女房の装束に、童2人、半物2人、雑仕4人が「濃打相」を着用したと記されている¹⁸⁾。

『長秋記』に五節の舞姫の装束として、「打祖一重、纈纈裳、青摺唐衣」（元永2〈1119〉年11月14日）、『玉海』¹⁹⁾には、「舞姫已下今夜退出、大将五節装束已下饗祿等注文、舞姫装束 丑日 赤色唐衣、濃打祖、裏濃蘇芳祖一領」（元暦元〈1184〉年11月22日）とある。

「打祖」とは、女房装束の一具であることから、打った「桂」すなわち打衣のことである。後者の例では濃色の表地を打ち、裏地は濃蘇芳で仕立てた打衣をさすものと考えられる。

⑧打唐衣

『胡曹抄』に、忠順記を引いて、「永暦二（1161）年正月廿九日、中納言中将嫁娶、今夜女房已下装束、（…）下仕二人、白衣五、白単、濃打衣、白打唐衣、濃袴」²⁰⁾とあり、婚礼行事に下仕が白い打唐衣を着用している。これは唐衣の裏地および表に折り返した襟に打ちを施したものと思われる。ただし今のところ、本史料の他に「打唐衣」の名称の用例はみられない。

⑨打裳

これは砧で打って光沢を出した裳のことである。

『中右記』に、「今日午刻許参入鳥羽殿（…）僧装束表衣甲袈裟、打裳奴袴」（長治2〈1105〉年2月12日）、「今日中宮奉為先帝被修八講（…）僧十口参上、表衣指貫、甲袈裟、打裳装束也」（嘉承2〈1107〉年閏10月12日）、また『長秋記』に「詣向田中新造堂、（…）良久法親王出給、打裳表衣、白袈裟指貫」（保延元〈1135〉年1月28日）とあるように、いずれも僧職にある者が打裳を着用している。

現時点では、打裳に関する用例は、僧装束の一具としてのみであり、女房装束の裳に打ちを施した例は見当たらない。従って平安時代には、女房装束の裳に打ちは施されていなかったのではないと思われる。

⑩打物

『栄花物語』には産養の行事に際し、「例の色聴されたるは、青色赤色の唐衣に、地摺の裳、表著は、押しわたし（て）蘇芳の織物也。打物ども、濃き薄き紅葉をこきまぜたるやうなり」（はつはな）とあり、禁色をゆるされた女房が女房装束の一具として打物を着用している。従って、この打物とは打衣をさしている。

⑪打衣

「打衣」は「擣衣」とも書き、男女共に用いられた。広くは「打った御衣」全般を意味する場合もあるが、打衣は一つの装束名称になっている。

＜男性装束＞

『栄花物語』には、「通基の四位侍従、二藍の直衣、青色の織物の指貫、濃き打衣」（歌合）、「蔵人の少将（…）香りにうすものの青き襲ねたる襖に、濃紫の固文の指貫著て紅の打衣などぞ著給へる」（はつはな）、『小右記』には「平絹直衣、紫織物指貫、紅綾擣衣、一重山吹色綾衣、紅三重袴」（寛仁2〈1018〉年12月6日）とあり、直衣や襖の下に濃きや紅の打衣を着用している。

『中右記』にも、賀茂臨時祭に「使雑色薄蘇芳濃打衣…」(寛治7〈1093〉年11月23日)、「今日太上法王参御八幡宮（…）御隨身冠狩衣、皆着打衣」（嘉承元〈1106〉年7月27日）、小舎人童の装束として「二藍織物狩衣、袴以白糸縫丸文藤花、結花付之、紅打衣、下絵出衣」（嘉承3〈1108〉年4月24日）など多くの用例があり、狩衣の下にも打衣が着用されている。

また『同書』に「中納言中将、衣冠、薄色浮文指貫、出衣紅打衣」（天永2〈1111〉年12月18日）、『飭抄』²¹⁾に「新院崇徳修正御幸。隆

長衣冠。出紅打衣」（久寿元〈1154〉年正月8日）、「中納言中将基房春日祭進発。直衣。出紅打衣…」(平治元〈1159〉年2月10日)とあり、御幸や祭事において、衣冠姿や直衣姿に紅打衣を出衣にする例が頻出する。

『飭抄』には、永久2〈1114〉年2月14日、保延2〈1136〉年12月28日、仁平3〈1153〉年11月16日、12月28日、仁安2〈1167〉年10月24日、同3〈1168〉年11月21日)に、紅の打衣を直衣の下に着用する例がみられる。

このように打衣は、衣冠の袍、直衣、襖、狩衣の下に着用されており、打ちを施した「相」をさしている。そして晴れの儀式の着装法である「出衣」にも見られ、特に紅の打衣が多用されている。

打衣の色目は紅が最も多く、次いで濃き、その他蘇芳²²⁾がみられる。特に赤系統が多いのは、本来相に紅が用いられていたこと、そして打ちによる光沢に最も映える色が紅であり、色彩効果が第一に勘案されたからであろう。

また『中右記』に、「祭間序下部装束可制事、錦紅打衣金銀類、（…）如鈴鏡風流事」（永久2〈1114〉年4月6日）とあるように、紅打衣は賀茂祭の間、錦や金銀とならび、鏡鈴を用いることと同様に風流とされ、その着用が禁じられた。しかし一方で祭礼時には「一日晴れ」といって許されることもあり、実際には禁制は徹底されず、守られていなかったようである²³⁾。

打衣の着用時期については、『飭抄』に「近代多不着之。（…）尋常之儀。雖冬束帶着打衣云々。夏赤帷上付張相」²⁴⁾とあり、平安末期から鎌倉初期にかけて、通常儀式には、冬の束帯の時に打衣を着るが、夏には帷の上に張相をつけたものを着るようになった。

しかしその後の嘉禎3〈1237〉年4月23日の八幡行幸にも、舞人が皆「如冬打衣相単衣着」²⁵⁾とあり、鎌倉時代に入っても、4月にはまだ冬の束帯着用時のように打衣を着ていたようである。しかし室町時代には冬以外に打衣を着ることはなくなった²⁶⁾。

＜女性装束＞

一方女性装束における打衣とは、女房装束「唐衣裳」の一具として、表着の下、重桂の上に着る打った桂のことをいう。これは重桂の一番上の一枚を美麗にすることから生じたといわれる。

平安時代中期の比較的早い時期に、男性の打衣の名称が出現するのに対して、女性の打衣の用例は極めて少なく、先述のように、「打ちたる」と表現される場合が多い。

『小右記』に記された五節舞姫装束「赤色唐衣、蘇芳織物掛、地摺裳、三重袴等也、擣綾掛綾…」(寛仁3〈1019〉年11月13日)や、「下仕四人茜染擣掛四重」(万寿2〈1025〉年9月13日)にある「擣掛」が打衣をさす早い例ではないかと思われる。

『古今著聞集』(巻第5和歌第6)には、「打衣」の名称がみられる。

「その夜のことにや、(…)さる程に、寝殿より打衣きたる女房歩みいでて、笙をもちて殿上人にたまはせけり」(嘉保1096)3年1月30日)とあり、これは女房が打衣を最も上に着た珍しい例である²⁷⁾。恐らくここでの打衣は、女房装束の一具として着用されたのではなく、重ね桂の装いであろう。

その後『中右記』に、「女房出衣染衣也、蘇芳濃打衣」(康和5〈1103〉年1月24日)、『長秋記』に、「女房十六人中、十二人色々衣濃打衣、今二人上臈表白衣濃打衣」(元永〈1119〉2年10月21日)とあり、女房に濃色の打衣がよく用いられている。

また『同書』には賀茂祭で、「下仕車、出菖蒲生衣、紅打衣…」(天承元〈1131〉年4月19日)とあり、下仕車に紅打衣の出衣がみられる。『中右記』にも院姫君の着袴の催しの折に、女房に「出衣蘇芳青打衣」(保延3〈1137〉年12月10日)とあり、蘇芳と青の打衣の出衣があった。

『満佐須計装束抄』²⁸⁾(1160年以降成立か)には、「うちぎぬは、きぬのたけより六七寸ばかりみじかくすべし」、「…くれなゐなれども、きぬに志たがひて、こきうちはなだ、えびぞめうち、あをうち、すはうち、志らうち、つね

のことなり」とあり、打衣の身丈の寸法も定まり、様々な色目の打衣があったことが知れる。

また『胡曹抄』に、忠順記を引いて「今日中納言殿渡御第四日之是日人々改着装束 女房上臈四人(…) 紅打衣 (…)

中下臈十六人(…) 紅打衣」(永暦2〈1161〉年2月2日)²⁹⁾、『山槐記』に、「関白藤原基房母可令参内給、(…)白三陪单衣、濃打衣、白表着、紫青杏葉文…」(治承3〈1179〉年2月10日)とあり、平安時代後期になると打衣の用例が多くみられるようになる。

一方『吉記』に、承安4〈1174〉年8月の半物の装束として「紅打衣」の名称はあるが、建春門院御服や雑仕の装束に「打衣」は見当たらない。その代わりに「紅引倍支」の名称が記されている。平安時代末期になると、夏期には引倍支を袷仕立ての打衣に代えて着用することが多くなったと考えられる。

打衣の色目は、紅、濃色が多く、他に山吹、青、葡萄染、茜染などが用いられた。ただし、『栄花物語』に「紅の打衣は猶制ありとて山吹の打ちたる黄なる表着竜胆の唐衣なり」(布引の瀧)とあることから、男性と同様、女性の打衣の色目にも禁制があり、紅色の打衣は自由に着ることが許されず、ここでは紅ではなく山吹の打衣としている。

鎌倉時代に入っても女房装束の一具として打衣の名称があり、引き続き打衣の用例に変化はみられない³⁰⁾。

●打目の美意識

打衣の砧で打った後の痕や光沢の具合のことを打目(擣目)という。

打目については、『うつほ物語』に「色・香・打ち目、よになくめでたし」(蔵開^中)、『源氏物語』に「白き綾の、なつかしげなるに、今様色の、擣目なども清らかなるを着て」(東屋)、「なつかしきほどの直衣に、色こまやかなる御衣の、打目、いと、けうらに透きて」(夕霧)、『枕草子』に「紅の色、打目などがやくばかりぞ見ゆる」(返る年の二月二十余日)などとあり、打目を

「めでたし」、「きよらかなる」、「かがやくばかり」と形容している。

なお打衣について、鈴木敬三氏は次のように述べている³¹⁾。

表地を飯糊に滲して張りあげたいわゆる粉強^{こぼり}を砧で打ち敲いて柔軟にし、さらに貝殻で磨いて艶を出した衣を本義とする。これは重ね相の上から体形をととのえ、肩の線を均衡にし、束帯姿の外容をとりつくろうための下地とする刷^{つくろいぎぬ}衣である。

鈴木氏のいう打衣とは粉強（粉張のことか）をした上で、さらに砧で打ち、貝で磨く瑩の技法を組み合わせたものである。強い張りというより、柔軟性をもたせたほどよい張り加減と艶が重視されている。つまりこれまでの打衣にはなかった、装束全体の外観を整える役割が求められているが、これは少なくとも鳥羽院が始めたという強装束が流行し、束帯が如木と呼ばれた頃、つまり平安時代末期の打衣に対する見解であると考えられる。

打衣の目的・役割が、平安中期頃の砧による打ちによって生じる光沢の美しさを第一義としたものから、平安末期の装束全体の強い張りを下支えするファンデーションへと変化したことを示唆している。そしてこの現象が打ちから板引へとその技法を移行・発展させる契機となったと考える。

(2) 搔練

●搔練とは

「皆練」とも書き、表紅・裏紅という重色目の名称でもあるが、『貞丈雑記』に「搔練の事」として、「…練らざる生^{すずし}の絹に対して、練りたる絹を搔練^{かいねり}という也」とあるように、色目とは関係なく、絹地を練った加工法のことでもある。また砧でよく打って練った絹地ともいわれる³²⁾。

『落窪物語』（一の巻）には、「白き衣、うへにつややかなる搔練の相著たり」、また「白き桂のいと清げなる、搔練のつややかなる一かさね」³³⁾とあり、搔練はつややかなもの、つまり、とても艶のあるものとして認識されている。

『うつほ物語』に「搔練のめでたく打ちたる、朝ばらけにいととおかし」（楼上_上）とあるように、搔練をさらに砧でよく打ったことから「打衣」ともいった。ただし光沢、艶を出すためには、打つ前に生絹を十分練る必要がある。11世紀前半頃までは打衣と共に搔練衣が重桂の上に用いられたという³⁴⁾。

●用例

搔練の名称は平安時代中期の早い時期によくみられる。

『うつほ物語』に、「宰相に搔練一襲、殿上人うち被きてゐ給へり」（田鶴の群鳥）とあり、女装束の搔練一襲が被けられている。その他にも「六の宮紅の搔練のいと濃き一襲」、「搔練の御衣」、「綾搔練の桂」、「綾搔練の相」（蔵開_上）、「平絹の搔練の御衣一襲」、「綾の搔練の単襲」（国譲_中）など搔練を施した装束が多見する。当時の人々の搔練に対する好尚の程がうかがえる。

また『飢抄』には、天仁2（1109）年正月1日、永久4（1116）年正月2日、長承3（1134）年正月3日の臨時客に、殿下忠實、内府忠通、左大臣家忠が「皆練下重」（搔練下襲）を着用したとあり、平安時代後期（12世紀初頭）には、正月三が日に搔練の下襲がよく用いられている。

『兵範記』³⁵⁾には、「四方拝如例（…）左少将殿令参内、御装束欠掖位袍、（…）躑躅下襲面裏皆練、（…）毎時風流珍重、盡美」（仁平2（1152）年正月1日）とあり、躑躅の下襲には表裏共搔練が用いられている。その下襲を用いた束帯姿は、正月元旦の儀式にふさわしく、風流で美を尽くしたものであった。

このように搔練は相、桂、単、下襲などに用いられた。

また『助無智秘抄』³⁶⁾に、「火ノ色ノ下重。カイ子リトカハリタルモノナリ。火ノ色トハ。ウラオモテトモニ打物ニテ。中倍ヲ入タルナリ。カイ子リトハタダウラクレナ井ノハリタルニテ。中ヘモナキナリ。ノリユミノ日ハ。カイ子リヲキルコトナリ。」とある。搔練は火色とは異なり、火色が表裏共に打物で中倍があるのに対し

て、打物ではなく、中陪もなく、紅の裏を張ったものとしている。また賭弓の日に搔練を着用するとある。しかしこの記述については異論もあり、『助無智秘抄』の成立年（1200年頃か）からみて、平安末期から鎌倉初期における搔練の状況の一端を火色と比べて述べたものと思われる。

(3) 瑩と打瑩

●瑩

「瑩す」^{よう}、「瑩ず」^{やう}、「瑩」^{みがく}ともいい、『貞丈雑記』（巻5）に「瑩の事」として「張りたる絹を貝にてすりて光を出すを云うなり。」³⁷⁾とある。すなわち「瑩」とは、張った絹を瑩貝で摺り磨き、光沢を出すことと考えられる。

『枕草子』に、正暦4（993）年11月15日、五節の舞姫の舞が行われる夜、「皆装束したちて（…）、赤紐をかしう結び下げて、いみじう瑩じたる白き衣」（宮の五節出ださせたまふに）とあり、また賀茂臨時祭の舞人（陪従）装束は「半臂の緒の、瑩じたるやうにかかりたる、地摺の袴の中より氷かど驚くばかりなる打且など、すべていとめでたし」（見物は）と記されている。

五節舞姫装束の白き衣に瑩が施されたり、賀茂臨時祭の舞人の半臂の長い緒が瑩じたように光沢をもって結びかかっている様子がうかがえる。

『栄花物語』には、手輿をもつ従者が「青く裏瑩じたる絹袴着て」（玉の飾り）とあり、裏を磨いて青く光沢を出した絹の袴をはいている。

一方『うつほ物語』には、「御髪の麗しくをかしげに、清らなる黒紫の絹を瑩せると、生ひたる限り」、「御髪は、瑩じかけたるごとくに」（蔵開上）とあるように、瑩することが、つややかな髪の毛の形容にも使われている。

つまり瑩も打ちと同様に、艶や光沢を出すための一つの技法として用いられていたのである。

『西宮記』（巻17）に、蘇芳の下襲は「夏冬瑩之」とあり、早くから下襲に瑩の加工が行われていた。『胡曹抄』（久寿2〈1155〉年10月5日東宮行啓時の装束を引用）にも、皇太子の童

体の赤色欠腋袍着用時に「躑躅下襲 表白瑩小葵綾中陪水色平絹張裏濃打…」³⁸⁾とあり、中陪のある躑躅の下襲には、白の表地に瑩が施されている。

『飴抄』に、「一、下襲 冬。面浮線綾文。粉張瑩之。（…）宿老之人面裏張着之。不瑩不打。称フクサ張下重。或称張下重云々。」³⁹⁾とあり、冬の下襲に「粉張り」と「瑩」が併用されていた。なお宿老の下襲は表裏を張るが、打ちと瑩は行われなかった。

『助無智秘抄』には、新蔵人初参時の装束として「表袴。ヒラギヌ瑩。」⁴⁰⁾とあり、平絹の表袴にも瑩がみられた。

『満佐須計装束抄』に、五節所の童装束の表袴の表地に「しろくはりてやうして…」とあり、白地に張りとう瑩が併用されている。

●打瑩

絹地を砧でたたいたり、瑩貝でみがいて光沢を出すことである。

『小右記』に「使少将俊家参院、関白差使、（…）関白再三被傾奇、馬副装束以絹染深蘇芳搗瑩などあけたり」（長元5〈1032〉年4月21日）、また『うつほ物語』に「壁代には、白き綾を打ち瑩したり」（蔵開中）とあり、馬副装束や壁代に「打瑩」（搗瑩）の加工が施されている。

(4) 張り

●張りとは

「張り」とは、絹・布・衣などを糊につけ、板に張って光沢を出し、ぴんとさせることである。方法によって、布を板に張る「板張り」、布に糊をつけて板に張る「糊張り」、白絹に糊を強く付けて張りとう光沢を出す「白張り」の種類がある。ただし、「板張り」をしただけでは光沢が出ないので、糊を用いて張りとう光沢を出す。

『伊勢物語』に、「うへのきぬを洗ひて、手づから張りけり。（…）さるいやしきわざもならはざりければ、うへのきぬのかたを張り破りてけり。」（紫の）⁴¹⁾とあり、妻が夫の袍を水

洗った後で自ら板張りをしたが、身分の低い者がするような技を習っていなかったので、肩の所を張り破いてしまったという。このことから、張りの作業は自宅でも手軽に行われていたと思われるが、技術もなく慣れない者には難しかったのであろう。ただし板張りは、それだけでは光沢は出ず、布に張りを持たせる効果しかなかった。

『枕草子』に、「張りたる白き単衣のいみじうあざやかなるを着給ひて…」(小白川といふ所は)とあるように、ここでは単衣の白い布地に張りを持たせ、艶や光沢も付加して鮮やかにみせている。『栄花物語』の「薄鈍の桂のりばりなどの綾無文あるいは固文の織物また今様のつやつやなどいふをぞ六つばかりづつ綿薄らかにて着せたる」(もとのしずく)との記述からも、糊張りによってつやつやとした美しい光沢が出たことがうかがえる。

また『枕草子』に「中納言の君の、紅の張りたるを着て」(十月十余日の月いと明かきに)という記述からも、「張りたる」とは張った衣、つまり桂を着用していると考えられる。

●用例

張りを施した装束には、それぞれ「張」の名称がつけられ、^{はりぎぬ}張衣(相)、張単衣、張下襲、張袴、張裳、^{しらはりのはかま}白張、白張袴、張物などと表現されている。

①張衣(相)

板張りにした布帛で作った衣のことである。

『中右記』には、賀茂臨時祭に「取物青丹款冬張衣」(寛治7〈1093〉年11月23日)、春日祭上卿発向の日に「蔵人頭権右中弁實行、衣冠、紅張衣出衣」(天永3〈1112〉年2月8日)とあり、『兵範記』(仁安3〈1168〉年12月16日)にも、賀茂臨時祭に「院御厩舎人武廉著萌木狩襖款冬張衣」とある。

賀茂臨時祭や春日祭の関連行事といった晴れの日に、衣冠の袍や狩襖の下に紅や款冬の張衣が着用されている。張衣とはいずれも張った相をさし、紅張衣(相)は紅打相と同様に、出衣

としても用いられた。

②張単衣

先述の『枕草子』に、「三位の中將とは(…)、唐の薄物の二藍の御直衣、二藍の織物の指貫、濃き蘇芳の下の御袴に、張りたる白き単衣の…」(小白川といふ所は)とあり、三位の中將すなわち道隆が直衣の下に張った白い単衣を着用している。

『長秋記』に「三夜御産養(…)采女六人(…)皆給當色白張単衣、裳、唐衣…」(元永2〈1119〉年5月30日)とあり、産養に際して、采女に女房装束の一具として、白く張った単衣が授けられた。『兵範記』には「今日行幸法住寺御所、(…)東間女房打出、(…)紅張単重、同色引倍木」(仁安3〈1168〉年8月4日)とあり、女房が8月に張った紅の単衣を重ね、さらに紅の引倍木を打出としている。

③張下襲

『西宮記』(巻17)には、「張下襲」の名称こそみられないが、藤柳の下襲に「打或張」の技法が用いられており、下襲を張ることは古くから行われていた。

『長秋記』に「…蘇芳張下襲何人可着乎、又冬春同事通用歟(…)仰云、蘇芳下襲老後着之、不分春冬」(天永2〈1111〉年4月27日)とあり、蘇芳の下襲にも張りが施されている。これは老後に着るもので、冬と春に用いるとされている。また『同書』に「蘇芳張下襲給也、其後予著此白張下襲」(天永4〈1113〉年1月19日)とあり、白張り下襲の用例もある。

④張袴

引糊を付けて地質を張らせた袴である。

『健寿御前日記』⁴²⁾に、「正月一日は、御所にも、うるはしく、打御衣、御張袴、(…)たてまつる」(正月三日がほど)、「七日、はぎおみなへし、(…)裳、唐衣、張袴、など、五日におなじ」(四月より七月までの服装)とあり、正月1日、5月5日、7日に女房装束の一具として張袴を着

用している。

『満佐須計装束抄』に、「わらはのさうぞく(…) つつじのかざみ。おもてあや。うへのはかま。おもてただきぬしろくはりてやうしてこきうちうらをつく。(…) こきはりばかまなり。」とあり、五節所の童女装束の白い表袴とその下に重ねる濃色の袴に張りが施されている。表袴の表地には「白張り」と「瑩」、裏地には「打ち」が施され、張りつつややかさを与えている。

『山槐記』⁴³⁾には、御装束として「御車後女房大宮局、故伊實卿女 紅薄様五、白単衣、紅打衣、萌黄表着、赤色唐衣、白腰裳、紅張袴」(治承3〈1179〉年2月10日)とあり、女房装束の紅袴に張りが施されている。

『胡曹抄』に、女房御装束事として「松重二倍織物小褂(…) 濃引倍木、薄蘇芳単重、濃張袴」(平治元〈1159〉年7月2日)、「紅張御袴」(元暦2〈1185〉年2月2日)、「張袴」(文治3〈1187〉年7月7日)⁴⁴⁾などがあり、特に平安時代末期になると女房装束としての張袴の用例が増加する。

一方『兵範記』には、「今日白川御堂東庭御塔建立也、(…) 先下給御装束、(…) 二藍亀甲文織物指貫、紅張袴」(仁平3〈1153〉年7月16日)とあり、指貫と共に紅張袴を賜わったことから、この張袴は男性の装束と思われる。

⑤白張

糊を強くつけた白地の狩衣、または白絹に糊を強くつけて光沢を出したものをいう。

前者の狩衣は雑色などが着用したことから、白張(はくちよう白丁)という装束名となり、またその職掌を表す名称ともなった。

後者の例としては、『落窪物語』(三の巻)に「清げなる若き人二十人ばかり、白張の単襲、二藍の裳、濃き袴著て…」とあり、若い女房達が白張の単衣を重ね着している。先述の「張りたる白き単衣」(『枕草子』)や「白張単衣」(『長秋記』)も広義には白張に含まれる。

⑥白張袴

白の張袴のことで、袴の裏に強く糊をつけて張るようにしたもの。

『うつほ物語』に、「被物は(…)、将監どもに白張袴」(吹上^上)とあり、ここでは被物として白張袴が与えられている。

⑦張裳

板張りにしてはった裳のことである。

『左経記』⁴⁵⁾に、「園教寺御堂供養(…) 梵音廿四人可着檀色甲檜皮色袍同色張裳」(長元7〈1033〉年9月28日)とあり、僧職者が僧装束の一具として張裳を着用している。

今のところこの他に用例が見当たらないことから、平安時代、女房装束の裳には、張りの技法は施されなかったと推察される。

⑧張物

絹布を板に張って光沢を出すことである。または張った絹布のことで、装束に仕立てる前の段階のものである。

『御堂関白記』⁴⁶⁾に「犬宮御五十(日)、(…) 給祿(…) 二捧入綾色々張三十疋・色々張物・打物百疋…」(寛弘7〈1010〉年正月15日)とあり、犬宮の五十日の祝いの席で、藤原道長より祿として張物が与えられている。

(5) 剥ぎ

●引倍木

「引倍木」は、「比陪木」、「曳陪支」、「曳倍支」とも書き、「ひきへぎ」の略称である。

初夏の料として、束帯の袷の裏を引き剥いで裏を除き、表地一枚だけにして耀かせたものを「比倍木」と呼んでいる。

ただし表一枚を光り耀かせるためには、裏地を引剥す前に、表地に加工を施しておかなければならない。

古くは『西宮記』(巻17)に「曳倍支」の項目名称がみられる。「四月八月九月の間用之」とあり、引倍木の着用期間は4月、8月、9月と定められるなど、季節感のある装束である。

『飭抄』に「引耗」として、「多炎天着之。先年修明門院春日一員御幸。宰相中将實氏着之」⁴⁷⁾とあり、多くは炎天に着用された。また『後照念院殿装束抄』に「法性寺殿御消息ニ云。引倍木。極熱之比不着之。以賀茂祭為終。以例幣行幸為始」⁴⁸⁾とあり、引倍木の着用時期は極熱の頃ではなく、例幣行幸に始まり、賀茂祭を以て終了するという。

『栄花物語』に女房装束の打出の様子を描写して、「そが中にも、紅・撫子などの比陪木どもの耀き渡れるに」(音楽)⁴⁹⁾とあり、また「関白殿の御下襲の菊の引倍木耀きて、目留りたる」(万寿元〈1024〉年9月19日)(駒競の行幸)⁵⁰⁾とある。

つまり、引倍木とは、単に暑さを凌ぎ、涼をとるためだけに装束の裏を除去し、一枚仕立てにしたものではない。そこには必ず「耀く」ことが求められ、重視されていたのである。

●用例

引倍木は裃(袷)、半臂、下襲にみられる。

①裃(袷)

『中右記』に、「中納言中将 頼長年十四 春日祭上卿勤給、(…)直衣、野剣、笏、比陪支衣、紅単衣、款冬織物出衣」(長承2〈1133〉年2月9日)とあり、夏の季節でもない2月の春日祭に、直衣の下に比陪支衣すなわち引倍木の裃が着用されている。

『吉記』には、「有入寺事、院於七條殿御棧敷有御見物(…)車副八人、白襖上下、(…)白引倍木、童、七郎丸、着赤色 上下山吹引倍支」(承安3〈1173〉年6月5日)とあり、6月に車副や童が襖の下に白や山吹色の引倍木、すなわち裃の裏を取り去ったものを着用している。

また『同書』に、建春門院御服の女房装束の一具として「紅打引倍支」(承安4〈1174〉年8月)の名称もみられる。これは紅地に打ちを施した裃の裏を引き剥がしたものである。ここでは引倍木と打ちの技法が併用されている。

②半臂

『飭抄』に「曳陪支下重半臂の事」として、「土御門斎院(…)御禊也。向新大納言 師實 出立所日。装束表衣如常。曳陪支半臂黒打綾。」(康平2〈1059〉年4月12日)⁵¹⁾とある。『長秋記』(保延元〈1135〉年4月18日)には、賀茂祭に「次使装束畢、腋闕袍、ひへきの半臂下襲、濃打裃単衣…」とあり、いずれも4月に行われた御禊、賀茂祭に引倍木の半臂が着用されている。

③下襲

『小右記』(長和2〈1013〉年9月16日)に「左大臣着蘇芳引へ木下襲、権大納言頼通着黄朽葉織物下襲」とあり、左大臣だけが引倍木の下襲を着用している。これは下襲に引倍木が用いられた早い例であろう。『中右記』にも、賀茂祭に近衛府使少将が「比陪支下襲」(天永2〈1111〉年4月18日)を着用したとの記述がある。

『飭抄』には、賀茂行幸に「関白(忠實)候御後 騎馬 着引耗下重」(保安元〈1120〉年4月)⁵²⁾、『後照念院殿装束抄』には、八幡行幸に「曆云。(…)今日ヒヘギノ下襲。半臂」(天仁2〈1109〉年4月26日)、賀茂行幸に「濃打ノ下重。號引倍木」(保安2〈1122〉年4月7日)、賀茂詣に「殿下(基通)濃色引倍木、御下重打物也」(文治元〈1185〉年4月22日)⁵³⁾とある。

このように4月に行われた行幸などに、引倍木の下襲が着用されている。また「濃打ノ下重」、「御下重打物」とあるように、引倍木の下襲には、引き剥がす前に打ちが施されている。

4. 結び

平安時代、装束を装飾的に加工する技法には、打ち、搔練、瑩、打瑩、張り(板張り・糊張り・白張)、剥ぎ(引倍木)、粉張りがあった。

それらの技法と効果、装束の用例についてまとめると、表1の通りである。

技法の中で最も用例が多かったのは「打ち」であった。次いで「張り」、平安時代後期からは「剥ぎ」(引倍木)が多くみられた。

「打ち」は、砧で打った光り輝く打目が何よ

りもめでたいものとして賞翫され、襖・襖袴、狩衣、半臂、下襲、表袴、袴、指貫、裃、袴、唐衣、僧服の裳など実に多くの種類の装束に用いられた。

打ちを施した裃と袴は打衣という一つの装束名称にもなった。打衣は、男性には裃として直衣や狩衣の下に、女性には袴として女房装束の表着の下、重袴の上に着用された。

「搔練」も艶を出す手法として平安時代中期にもてはやされ、下襲、裃、袴、単に多用された。「張り」は裃、単、袴、表袴、袴、僧服の裳に用いられ、瑩と組み合わせることもあった。「瑩」、「打瑩」も光沢を出す技法で、下襲、表袴、袴、袴、袴、馬副装束に用いられた。

「剥ぎ」すなわち「引倍木」も古くから行われ、半臂、下襲、裃、袴に用いられた。引き剥がす前に打ちが施され、夏季の料としての用途だけではなく、装束を耀かせることが重視されていた。

これらの技法には、張りを除く6種の全てに艶と光沢を付与する効果があった。ただし張りも糊張りによって光沢を得ることができるので、これらの装飾加工技法は全て艶や光沢をもたらすものであったといえる。

また張りや固さは、張りと剥ぎ（引倍木）により、柔らかさは打ち、搔練、瑩、粉張りにより、その効果を得ることができた。この中でも特に打ちや張りを施した装束は、祭礼などの晴れの日に用いられ、美麗、過差、風流として禁制の対象とされた。

搔練、瑩、剥ぎ（引倍木）も、はじめは光沢や艶を出すために単独で用いられたが、打ちと併用すること、つまり複合的に技法を用いることで、より一層装飾的効果を高めることができた。

各装束に用いられた装飾加工技法をまとめると、表2の通りである。

装束の中でも最も多くの種類の技法が用いられていたのは下襲であった。下襲には打ち、搔練、瑩、張り、剥ぎ（引倍木）、粉張りなどが用いられた。次に袴が多く、打ち、搔練、瑩、

張り、剥ぎ（引倍木）が用いられた。男性の裃には打ち、搔練、張り、剥ぎ（引倍木）、男女の袴には、打ち、搔練、瑩、張りが用いられた。

この中でも特に下襲の裾と袴は、上衣の下からではあるが、外部への露出度が最も大きいことから、お洒落の見せどころとなったのであろう。

このように、打ちや搔練をはじめとする装飾技法によって、装束の地質自体が光り輝くことは、装束を纏う自身が自ら発光体となって光を発することである。つまり光は信仰の源であり、美の大きな要素となり、それは吉祥性の具現でもあった。

しかし、装飾技法の施された装束は、その大半が最表衣としてではなく、装束下の內衣として着用されるものであった。「出衣」や「打出」として装束の一部を外部に出して、その美を誇ることはあっても、装飾技法の施された装束全体の形が表に現れることは殆どなかったのである。それ故、装飾技法の効果は部分的にしか表出されないが、装束の襟元や袖口、裾からのぞき見える艶やかさや耀きの、その奥ゆかしい美しさが何よりも好まれたのであろう。

初めは砧打ちによるしなやかさと輝きを賞美していた貴族も、平安時代も後期になると、次第に強装束流行の波を受けて張りを重視し始め、装飾加工技法に装束の外観の整容効果を求めるようになった。その結果、平安時代末期から鎌倉時代にかけて、それらの技法の目的も変化してゆくことになる。

平安時代の装飾加工技法とは、重ね着による装束全体の総合美を演出し、装束の文様や色彩による意匠表現に加えて、さらなる装飾美を追求する、実に贅沢なものであったといえる。

表 1. 装束加工法による効果と装束の用例

加工法	艶・光沢	張り・堅さ	柔らかさ	用いられた装束
打ち（砧打ち）	○	×	○	男：襖・狩衣・半臂・下襲・裃・表袴・指貫・ 襖袴・袴・裳（僧装束） 女：唐衣・袷（裃）・袴
搔練	○	×	○	男：下襲・裃 女：袷・裃・単
瑩	○	×	○	男：下襲・表袴・袴 女：袷・表袴（童装束）
打瑩	○	×	×	男：馬副装束
張り	△	○	×	男：下襲・裃・単・袴・裳（僧装束） 女：袷・単・表袴・袴
剥ぎ（比倍木）	○	○	×	男：半臂・下襲・裃 女：袷
粉（胡粉）張り	○	×	×	男：下襲

表 2. 装束に用いられた装飾加工技法

男性装束	半臂	打ち・引倍木
	下襲	打ち・搔練・瑩・張り・引倍木・粉張り
	裃	打ち・搔練・張り・引倍木
	単	張り
	襖	打ち
	表袴	打ち・瑩
	指貫	打ち
	襖袴	打ち
	袴	打ち・瑩・張り
	（馬副装束）	打瑩
	裳（僧装束）	打ち・張り
女性装束	唐衣	打ち
	袷	打ち・搔練・瑩・張り・引倍木
	裃	打ち・搔練
	単	搔練・張り
	表袴	打ち・瑩・張り
	袴	打ち・張り

注

- 1) 装飾加工技法については、主に以下の文献を参考にした。
 - ①江馬務『江馬務著作集』、中央公論社、1977
 - ②和田辰男『日本服装史』、雄山閣、1960
 - ③河鱈実英『有職故実図鑑』、東京堂出版、1972
 - ④高田俊男『服装の歴史』、中央公論新社、2005
 - ⑤鈴木敬三解説・編『高倉家調進控 装束織文集成』、国学院大学、1983
 - ⑥あかね会編『平安朝服飾百科辞典』講談社、1975
 - ⑦『古事類苑』(42 服飾部) 吉川弘文館、1981
- 2) 源順『倭名類聚鈔』、渋川清右衛門、1667
- 3) 日本古典文学大系『古今著聞集』、岩波書店、1976
- 4) 日本古典文学大系『源氏物語』、岩波書店、1980
- 5) 新編日本古典文学全集『枕草子』、小学館、1997
- 6) 伊勢貞丈『貞丈雑記』(東洋文庫)、平凡社、1985
- 7) 日本古典文学大系『栄花物語』上・下、岩波書店 1965
- 8) 『小右記』、(『増補史料大成』所収)、臨川書店、1975
- 9) 『中右記』、(『増補史料大成』所収)、臨川書店、1975
- 10) 『西宮記』第二、(『増訂故実叢書』第40回所収)、吉川弘文館、1931
- 11) 『長秋記』、(『増補史料大成』所収)、臨川書店、1975
- 12) 日本古典文学大系『宇津保物語』、岩波書店、1975、1976
- 13) 『うつほ物語』、おうふう、1995
- 14) 日本古典全集『健寿御前日記』、朝日新聞社、1954
- 15) 『吉記』、(『増補史料大成』所収)、臨川書店、1975
- 16) 鈴木敬三、前掲書、229 頁
- 17) 衾については、原文によって衾の文字をあてる場合があるが、本稿では衾の文字に統一する。
- 18) 『胡曹抄』(<http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/wa03/>)、65～66 頁
- 19) 『玉海』、(徳川黎明会叢書)、思文閣出版、1990
- 20) 前掲『胡曹抄』、66 頁
- 21) 『飭抄』、(『群書類従』第8輯装束部・文筆部所収)、続群書類従完成会、1960、148 頁
- 22) 『飭抄』(永久4年11月13日)に「宗能出蘇芳打衣」とある。
- 23) 清水久美子「平安時代の風流の形態」、『風俗』第15巻第4号、日本風俗史学会、1977、61～62 頁。「平安時代の風流服飾とその周辺」、『同志社家政』第12号、1978、5 頁
- 24) 前掲『飭抄』、137 頁
- 25) 同書、178 頁
- 26) 『深窓秘抄』、(前掲『群書類従』第8輯装束部・文筆部所収) 応仁2(1468)年8月に、打衣について「今ハ着用ノ人ナシ。冬ハ打衣ヲカサヌル也。夏ハ大帷也。其上ニ張帊ヲキル。」とある。
- 27) 『国文故実風俗語集釈』、(前掲『江馬務著作集』第12巻所収)、131 頁に指摘がある。
- 28) 『満佐須計装束抄』、(前掲『群書類従』第8輯装束部・文筆部所収)
- 29) 前掲『胡曹抄』、66 頁
- 30) 今川文雄校訂『玉蘂』、思文閣出版、1992 承元3(1209)年3月23日に「摂政前太政大臣良経長女有入宮名立子(…)御使女房中納言範光卿女、著唐衣、打衣、裳等」とあり、打衣は平安時代末期から鎌倉時代以降にも引き続き着用されている。
- 31) 鈴木敬三氏 前掲書、228 頁
- 32) あかね会編、前掲書、148 頁
- 33) 日本古典文学大系『落窪物語』、岩波書店、1957、18～19 頁、69 頁
- 34) 大丸弘『平安時代の服装』、成美社、1961、133 頁参照
- 35) 『兵範記』、(『増補史料大成』所収)、臨川書店、1965
- 36) 『助無智秘抄』、(前掲『群書類従』第8輯装束部・文筆部所収)、92 頁
- 37) 前掲『貞丈雑記』、87 頁
- 38) 前掲『胡曹抄』、57 頁
- 39) 前掲『飭抄』、127 頁
- 40) 前掲『助無智秘抄』、119 頁
- 41) 阿部俊子全訳注『伊勢物語』上、講談社、2007
- 42) 前掲『健寿御前日記』、149 頁
- 43) 『山槐記』、(『増補史料大成』所収)、臨川書店、1975
- 44) 前掲『胡曹抄』、70 頁
- 45) 『左経記』、(『増補史料大成』所収)、臨川書店、1975
- 46) 『御堂関白記』中、(『大日本古記録』所収)、岩

波書店、1952

47) 前掲『飭抄』、133 頁

48) 『後照念院殿装束抄』、(前掲『群書類従』第 8 輯
装束部・文筆部所収) 202 頁

49) 前掲『栄花物語』下の 64 頁注 14 に、引倍木の
ことを板引したものと記されている。しかしこ
の時期にはまだ板引の名称は出現していない。

従って引倍木を板引とするのは早計である。

50) この記事の駒競の行幸の時期については、『小右
記』参照。

51) 前掲『飭抄』、133 頁

52) 同書、133 頁

53) 前掲『後照念院殿装束抄』、201 ～ 202 頁